

題 目 デフォルト戦略としての不作為
ー トロッコ倫理問題を用いた比較文化的検討ー

氏 名 山本翔子

指導教官 結城雅樹

我々はときに価値観や信念と一致しない行動をとってしまう。こうした価値観や信念と行動の不一致は、「不作為は作為に比べて許される (Kurzban, et al., 2011)」ために不作為的行動 (何もしないなど) を採ることによって生じるものだ。しかし倫理判断問題において、この価値観や信念と行動の不一致が中国ではみられたが、イギリスではみられず価値観や信念と行動が一致していた (Gold et al., 2014)。本研究ではこの文化差を社会環境構造の違いに注目して検証を試みる。その 1 つとして社会生態学的要因の 1 つである関係流動性 (Yuki et al, 2007) に着目して考える。関係流動性とは当該社会環境に存在する、新たな対人関係の形成、あるいは既存の関係の維持・解消に関する選択自由度のことである。東アジアを代表とする低関係流動性社会は閉鎖的な社会であるため、他者から批判された場合のコストが大きい。一方北米を代表とする高関係流動性社会では開放的な社会であるため、低関係流動性社会に比べて批判された場合のコストは小さい。このため、低関係流動性社会の方がより他者からの評判を気にかけた行動を採ると考えられ、自身の行動が他者に与える影響が定かでないとき、安全策として他者の評判を気にした行動を採ることが望ましい。そのため自身の価値観や信念に関わらず、作為的行動に比べてより許される不作為的行動を多く採ると考えられる。そこで本研究では価値観や信念と行動のかい離が日米の状況設定が明らかでないときに採るデフォルト戦略の違いによることを明らかにすべく、倫理判断問題の枠組みを用い研究を行った。研究では他者評価の有無を操作し評価あり・評価なし・デフォルトの 3 条件を用いた。また社会環境構造の違いである関係流動性が結果に影響を与えるかを検討した。さらに回答者の価値観や信念に加え、他者の行動に対する評価や反応予測が行動に影響を与えるかを検討した。分析の結果作為的行動の文化差は一部でしかみられず、信念と作為的行動のかい離のパターンに日米差はみられなかった。また、行動の日米差は関係流動性によって媒介された。倫理的判断が行動に対して影響を与えるパターンに日米で違いがみられ、アメリカでは他者評価の有無に関わらず倫理的判断に従った行動をし、日本では他者評価がないときのみ倫理的判断に従った行動をした。これは価値観や信念と実際の行動のかい離が、デフォルト戦略の日米差によることを一部示唆する結果である